

国際交流事後活動ニュース

# MACRO COSM

カラー 航空機による派遣事業より  
講演 アメリカの世紀の終わりの始まり(最終)

マクロコズム '98.1



vol. 20

(財)青少年国際交流推進センター



▲ 王光英全国人民代表大会常務委員会副委員長への表敬（北京の人民大会堂にて）

## 第19回日本・中国青年親善交流（派遣）

▼ 中華全国青年連合会の歓迎会で、初めて歌を披露



日中平和条約の締結を記念し、日本と中国両国政府の共同事業として昭和54年度に開始された事業で、二国間交流事業として我が国の青年約20名を中国に派遣するとともに中国の青年約30名を我が国に招へいしています。

第19回を迎えた本年は国交正常化25周年でもあり、山田理事長を団長とする代表団が、表敬、施設見学、ホームステイなどのプログラムを9月6日から9月24日の日程で体験しました。



▲ 書道の時間に団員の腕前を披露（北京第二実験小学校）



▲ 中日友誼林場にて記念植樹（江西省南昌市）



◀ 長沙市の湖南師範大学での交流  
お抹茶の味はいかが？

少数民族による歓迎会でバンブーダンスに挑戦  
▼（湖南省の張家界市にて）



◀ 学生とともに餃子作り  
佐藤団員「田島副団長の具、多くない？」



## 第11回日本・韓国青年親善交流 (1997.8.27 ~ 9.10)



◀ 全員集合。日本代表団総勢 40 名！

昭和 59 年の日本・韓国共同声明及び昭和 60 年の日韓国交正常化 20 周年を踏まえ、日本と韓国両国政府の共同事業として昭和 62 年に開始された事業で、二国間交流事業として我が国の青年約 40 名を韓国に派遣するとともに韓国の青年約 40 名を我が国に招へいしています。

第 11 回は、IYEO 関東ブロック幹事の和久団長を始めとする代表団が、表敬、施設見学、ホームステイなどのプログラムを 15 日間の日程で体験しました。



▼ 利川にて、韓国の陶芸を学ぶ



▶ KBS 放送にてアナウンサー気分

◀ 青少年修練院にてバスケット・ボールで交流

## 日本・中国青年親善交流事業

## 心に見える交流を目指して

財青少年国際交流推進センター

理事長 山田 馨司

(平成9年度派遣団団長)

中国では、どこでも最高のもてなしを受けました。中華全国青年連合会、各地の青年連合会及び訪問先の各機関や施設の幹部の方々はじめ関係者の皆さんに心から感謝します。

王光英全国人民代表大会常務委員会副委員長はじめ多くの政府要人、高級幹部の方々にお会いし、日中青年交流に対する期待の大きさに、身の引き締まる思いでした。

天壇、長城、故宮、黄竜洞、天子山、金鞭溪、ろ山、煙水亭、九江の長江大橋、上海のテレビ塔など、世界文化遺産や世界自然遺産を含む、多くの建造物や自然景観の規模の大きさ、素晴らしさを体で感じました。

抗日戦争記念館、周恩来記念館、湖南省博物館、毛沢東故居、ろ山博物館、上海博物館などで、中国の歴史について思いを新たにしました。

北大方正集团公司、湖南刺繡研究所、紅星村、共青城、江鈴汽車集团公司、上海証券取引所などで、中国産業界の新しい息吹を感じました。

北京第二実験小学、天津市の南開中学、湖南中医学院、湖南師範大学、江西財経大学、上海市の進才中学などで、中国の教育の進展ぶりを拝見しました。

老舎茶館や上海雑技公演での楽しいひとときも忘れることはできません。

ほんとに盛沢山のプログラムを用意していただきましたが、紙面の関係で、ここでは主な交流活動の模様を報告させていただきます。ただし、交流のハイライト、ホームステイについては、紹介しきれないので、割愛します。

## 主な内容

日本・中国青年親善交流事業 …………… 5～8	スポーツを通しての
第12回青少年国際理解セミナー……………9～11	平和貢献を願って …………… 16～17
「第7回世界青年の船」団長 松尾式之	旅のうまうま～インド編～ …………… 18
ブルネイ再訪問(滋賀県)……………12～13	青少年国際理解セミナーのお知らせ …… 19
ブルネイでの出会い …………… 14～15	「世界青年の船」リユニオン ……………20

## 〈表紙の説明〉

「第8回世界青年の船」  
～上岡弘二団長 写真展～  
“青春群像 '96”の作品より  
\*スポーツ・デッキにて

### 1. 北京第二実験小学校

(9月9日(火)午後)

校長先生の概要説明を聞いた後、授業参観しながら各教室で生徒と交流しました。習字の教室では、日本の小学生との書の交換のほか、書道6段の団員が腕前を披露し、大喝采を受けました。

図画の教室では、日本の小学生の絵と折り紙を全員に配って鶴の折り方を実技指導、意外に時間がかかりました。音楽の教室では、生徒全員が中国語の歌を2曲と日本語で「汽車」を合唱、生徒代表がピアノを演奏、日本側はリコーダーに合わせて「さくら」を合唱、続いて「花」を合唱しました。小学生たちほど上手ではありませんでしたが、皆真剣に聞いて、拍手してくれました。こうして、2時間が瞬く間に過ぎました。

### 2. 南開中学校(天津市)

(9月10日(水)午後)

時間の関係で、授業参観は省略して中学2年の1クラスの生徒と懇談会。中国生徒4、5人と日本団員2、3人からなる8グループに分かれて懇談約30分(中国語のできる団員が多いということはあるがありがたいことです)。生徒たちの吹奏楽、伝統芸能、高校生の胡弓独奏を楽しみ、返礼として団員が中国語で「花心」を合唱すると生徒たちも少し声を合わせていました。なお、南開中学は、中等部と高等部を持ち、一流大学への進学率90%以上、周恩来の出身校として有名です。

### 3. 湖南省の少数民族(土家族、苗族)(張家界市)

(9月11日(木)夜)

昼前、張家界着、空港で湖南省青年連合会によ

る歓迎式。民族衣装の娘さんたちから花束。熱烈歓迎の横断幕。

夕食後地元の歓迎会場へ、女性団員はあでやかなゆかた姿で。少数民族の歌や踊り、日本側の歌、炭坑節(地元青年も加わる)、どじょうすくいと手品、日中入り交じってのバンブーダンス、日本の花婿と中国の花嫁で模擬結婚式と、予定を1時間もオーバーして10時半まで、外国にいることを忘れるほどでした。会場の内外に大勢の地元の人達が集まり、窓からも鈴なりになって見物していました。地元のテレビ局が団長にインタビューしました。



### 4. 湖南師範大学(長沙市)

(9月15日(月)午後)

日本語学科の学生と3グループに別れて座談会約40分。車座に腰掛けてはいましたが、実際には隣の人と一対一で日本語で話はずんでいるようでした。各テーブルにミネラルウォーター、くだもの、お菓子が用意してあるのに誰も手をつけず話に夢中。

座談会の会場を出て、図書館を見学、屋上から広大なキャンパスを展望。この間座談会に出席し

た学生が同行し、一対一で日本語で説明しながら案内。次いで卓球場へ、8台全部を使って各台毎に日中入り交じって勝ち抜き戦。団長、副団長以外の6人は全て中国の学生が優勝。賞品は中国の有名な化粧石鹸でした。引き続き、体育館に場所を移して日中混成チームで6人制バレー。交代で全員参加したのはよいけれど、サーブがネットに届かない人もいました。

夕方5時過ぎ、スポーツ交流を終え、女性団員がゆかたに着替えている間、男性団員は交流晩餐会場の大学内食堂でお好み焼きの準備。中国側はぎょうざの材料を準備しており、皆でぎょうざとお好み焼きを作りました。ほかにもたくさんの料理が用意されていて、楽しい夕食懇談会となりました。6時半のニュースで今朝の副省長表敬の様子が数秒間流れました。

午後8時、歓迎会場に場所を移して、歌と踊りの交流会。中国側司会者の日本語による挨拶に続いて、日本語学科の学生が日本語で歌と寸劇を披露、中国の歌や楽器演奏のほか芸術学部の男子学生による伝統舞踊もありました。日本側の出し物は、歌「花心」、茶道、手品、リコーダー演奏（さくら、エーデルワイス）、どじょうすくい（日中共演）、歌「花」、盆踊り（炭坑節、阿波踊り）



と多彩。団員から色紙と書をプレゼント。最後は全員輪になって「蛍の光」を合唱。10時半でした。

## 5. 長沙市近郊の農村、雨花亭郷紅星村

（9月16日（火）午前）

脱農業の裕福な家庭を訪問した後、村の小学校と幼稚園で約1時間の交流をしました。小学校の校門で生徒の鼓笛隊に華やかに迎えられ、5年生の教室で、折り紙を教えたり、紙風船を打ち合ったり、紙飛行機やしゃぼんだまを飛ばして、教室の中は大騒ぎになりました。日本の小学生の絵を交換し、隣接の幼稚園を訪問。おとなしく座っていた園児たちも団員がいきなり飛ばしたしゃぼんだまに飛びついてはしゃぎ始め、すぐになごやかな雰囲気になりました。園児全員の歌と園児代表の上手な踊りの後、団員が「むすんでひらいて」を教えました。子供心にかえったところで鼓笛隊に送られ学校を後にしました。

昼食後は5時まで自由活動。前日仲良くなった湖南師範大学日本語学科の学生の案内で小グループ毎に市内観光と買い物をし、出発直前までホテルで名残を惜しんでいました。

### 6. 江西省共青城

(9月17日(水)午前)

共青城は、上海の共産主義青年団員たちが1955年この地にやってきて荒地を開墾したのに始まり、革命の情熱に燃えた青年たちの努力によって発展し、今では第1次産業から第3次産業まで備えた準行政区です。幹部の人たちだけでなく、団員との座談会に出席した青年も皆、このような歴史を誇りにし、政治意識が高く、共産党の指導などについて熱心に語り、中国人の愛国心を改めて印象づけられました。

### 7. ホストファミリーと(南昌市)

(9月20日(土)午後)

民泊の翌日、午前中は、それぞれ、民泊家庭の人たちと市内観光などで過ごし、午後1時半ホテルに集合、民泊家庭の人と共にバスで約1時間、南昌市湾里区にある中日友誼林場(江西省と姉妹関係にある岐阜県の協力で設置された広大な山)へ。あいにくの雨もやがて小降りになり、ホストファミリーと力を合わせて記念碑の近くに桜の苗木20本を無事植えつけました。参加者全員に立派な「荣誉证书」が授与されました。いつのまにか、どこからともなく集まってきた大勢の子供たちが見物していました。

夜は、江西省副省長主催の歓迎宴へ。ホストファミリーも参加し、独唱、合唱、デュエットと次々に歌が出て、賑やかで楽しい交歓会になりました。一晩で覚えたとは思えないくらい上手に「さくら」を合唱したホストファミリーもありました。最後に「蛍の光」の全員合唱で締めた後、いつまでも涙ながらに別れを惜しむ姿がありました。

### 8. 江西財経大学(政府の財経部に所属する大学)(南昌市)

(9月21日(日)午前)

団員とほぼ同数の学生が参加し、2部屋に分けられました。一方の部屋では、長テーブルを挟んで中国の学生と日本の団員が一对一で向かい合い、もう一方の部屋では応接セットを利用して4、5人のグループに分かれて、それぞれ、中国語のできる団員が通訳も兼ねて、活発な話し合いが行われました。

40分ほど話しをして、仲良くなったところで、皆連れ立って約1時間学内を見学しました。学内のテレビ局(24チャンネル)、学生寮(全寮制で、1部屋8人、各部屋のテレビでは教育番組のほか出身地の地方番組も楽しめる。)、学内食堂などをゆっくり説明を聞きながら回りました。外では軍事訓練中の新入生が迷彩服で歩いていました。

昼食会は、座談会に出席した学生たちとの交流会を兼ねて大学経営のレストランで行われました。歌による交歓、日本の大学書道部の書の贈呈がありました。

### 9. 進才中学校(上海市浦東地区)

(9月22日(月)午後)

この地方出身の台湾で成功した人の寄付金で最近できたばかりの公立学校(名称は中学だが、後期中等教育を行う高等学校)で、校舎はもちろん屋内プール、体育館、グラウンド、寮(全寮制)など全ての施設が豪華で、設備も完備していました。見学の途中で、生徒寮を見せてもらいながら生徒と話し、図書館の閲覧室では、居合わせた生徒と即席の懇談をしました。



## アメリカの世紀の終わりの始まり (最終)

～近代社会の終焉の先にあるもの～

上智大学教授

松尾 弑之

(「第7回世界青年の船」団長)

### 「完全無欠」のホテル

今、アメリカですごくはやっている小説があります。現在、日本語には訳されておりませんが、スティーブン・ミルハウザー (Steven Milhauser) 著の「Martin Dressler: The Tale of An American Dreamer」というのがあります。つまり、「アメリカの夢を見たマーティン・ドレスラーという人物の物語」ですね。これは、昨年出版されたばかりの本です。この中にこんなお話が出てきます。マーティン・ドレスラーという貧困から一生懸命がんばって身を起こした男は、「The Grand Cosmo」という名の巨大なホテルを建築します。この「The Grand Cosmo」というホテルの中では、全ての生活が成り立つというのです。つまり、トイレに行ったり、寝たり、朝起きたり、人と会ったり、ご飯を食べたり、というありとあらゆることが、このホテルの中だけで成り立つというのです。一回この「The Grand Cosmo」に入ってしまうと、人生の全てが間に合うために、外の世界に行く必要がないという完璧な世界をドレスラーは建

設します。ところが、著者は「これって間違っていたのではないの?」、「夢は夢でも、悪い夢を見ているのではないか?」と言うわけです。

この小説はまさに現代のアメリカ人の心を表しているのです。すなわち、アメリカの世紀と言われた20世紀に自分たちは何をやってきたのか。「The Grand Cosmo」という世界を作ってきたにすぎない、科学技術やら、大学の先生の英知やら、政府の管理による人間の幸せとやらを作って、その小宇宙の中で人間が満ち足りた生活ができる、そんな空間を創ろうとしてきた。まさにマーティン・ドレスラーは20世紀のアメリカって間違っていたのではないかと問いかけている。科学技術、あるいは近代施設の中でぬくぬくと一生過ごすということに対し、自己反省がアメリカでは起こるのです。これが、20世紀のアメリカの終わりなのです。少なくとも一部の学者はそう考えています。

### 「脱構築」の帰結としての「多元主義」

クリントン大統領の話に戻ります。今年の1月の就任演説の終わりのほうで、彼はこう言っています。演説をした1月20日は、マーティン・ルーサーの命日にあたるということで、黒人の精神的指導者を褒めたたえたあげく、「アメリカには神から贈られた贈り物がある。それは、この国が多様性に富んでいるということだ。そして自分こそが21世紀への架け橋だ」と言いました。確かに、21世紀になる時、彼は最後の勤めを終えて、大統領の座を譲ります。しかし、「アメリカが分散して、いろいろな人種のいろいろな趣味を持った人、いろいろな地域の人にばらけてしまって、21世紀に突入する。そして自分はそれを担うのだ」というのがクリントンが言っていることだと深読みすれば、これは大変な時代に我々は入りつつある。先程から言っているとおり、アメリカは先進国ですから、アメリカで行ったことが、30年後にユーラシア大陸で行われ、それを、世界の他の国々が追従していく可能性があります。

いままで、「アメリカ」というテーマでお話してまいりましたが、実は「アメリカ」を「我々の人生」、「我々の20世紀」、「我々の思想」という風におきかえることができるのではないのでしょうか。つまり、科学技術の思想を持って「ザ・ベスト・アンド・ブライテスト」つまり、「合理的で頭のいい人達」の意見に従って、中央政府による計画経済をやって本当に人間は幸せになりましたか？ベトナム戦争で勝利をおさめましたか？こ

ない。「ばらけてきちゃっている」ということに直面せざるを得ない、という深刻なお話です。

### 「個人」が光り輝く時代

私は「第7回世界青年の船」に乗せてもらいました。ここで実感したことがあります。「人間が本当に裸のままつきあうと、フィジー人もカナダ人もアメリカ人もソロモン群島の人も皆良いヤツだ。それぞれ一個の人間なんだ」ということです。しかしどうもそれだけでは私達の弱い頭では追いついていけないから「あの人はソロモン人、あの人は日本人」といういい加減なレッテルを張って個人の輝きをうすめてしまっているなあと私は船の上で実感したのです。あとで文化人類学の本を読んでいたら、「文化の中の個体間の差は文化差よりも大きい」と書いてありました。それはどうということかということ、同じ日本人の中での個人と



個人の違いのほうがよっぽど大きく、例えば、日本人と中国人と比べてみた時の差の方が小さいのだ」という定説があるというのです。すなわち、近代文明、近代技術がばらけて、アメリカもばらけて、20世紀を縛っていた合理主義、科学技術による社会運営が重んじられる社会はばらけてしまって、サラダボウルの時代に入り、我々は「光り輝く個人の時代」に入ったのではないのでしょうか。

国家というレッテルや文明の程度、エネルギーの利用の程度、ポケットの中の貨幣の重さの程度とかで人間が規定されるのではなくて、存在するだけで光り輝いている人間が、世界中に万華鏡のようにちらばっている、天空の星のように輝いているのだという、そういう時代がやってきているのです。つまり、近代文明という呪縛、20世紀という呪縛、アメリカという呪縛、戦後の日本は当然アメリカという呪縛の下で存在してきましたが、そういう呪縛から逃れることができる、素晴らしい人間の解放の時代がやってきているのではないかと。これが21世紀に向けての私の予想なのです。

「アメリカの世紀」が終わるというのは、ですから、非常に結構なことだと思います。それは私達の呪縛が終わることを意味しているのではないのでしょうか。最後はおおげさな話になってしまいましたけれど、結論は「個人の存在が万万歳」と言いたいのです。

(終わり)

※講演の後の質疑応答の中で松尾先生はこのようにもつけ加えられました。

多種多様な人達が身の周りにいる社会で、「あの人は～人である」とレッテルを貼って片づけておけば楽です。逆に、相手を、それぞれの人の皮膚の色も国籍も抜きにして、一人の人間として、「その人の存在の尊厳って一体なんだ?」「レッテルを抜きにした相手の本性は?」と考えることは、ものすごく疲れるでしょうし、様々な「人間」と平和に暮らすには、寛容さが必要です。

今、ハワイでは、同性愛者の結婚が認められています。先入観を克服して、あらゆる個人に存在理由があるのだと認めることは、大変エネルギーのいる「つらい知的作業」です。しかし、私達が「輝ける個人の時代」に生きるためには、心を広くして、知的なエネルギーを持って、この「つらさ」に耐えていかななくてはならないのです。



## ブルネイへの再訪問

滋賀県青年国際交流機構

谷口 克巳 (第2回世界青年の船)

滋賀県IYEOは、1997年6月に映えあるSSEAYPインターナショナル賞を受賞した。その受賞のきっかけとなった「滋賀県若人の翼」事業は、今回で13回目を迎え、11月22日から27日までの日程で、前回同様、ブルネイ王国（香港経由）を訪問した。

今回も、現地での行程は、IYEO本部を通じて、「東南アジア青年の船」のブルネイ同窓会組織であるベルサトゥ（BERSATU）に全面的に企画、協力して頂き、ホームステイをはじめ、青少年開発センターの訪問、国営テレビ・ラジオ局でのインタビューなど盛り沢山の内容で、大変有意義な体験をさせて頂いたことに、参加者一同心より感謝している。

昨年に引き続き2回目の訪問とあって、その歓迎ぶりもパワーアップされており、あまりの盛込さにしばしば戸惑う場面もあった。

空港に到着して驚いたのが、私たちの滞在国や若人の翼の文字の入ったおそろいのTシャツを着て、笑顔で出迎えてくれたBERSATUメンバーたちの姿であった。滞在中を通じて感じたことだが、彼らはまるで兄弟のように仲が良く、まとまっていて、「東南アジア青年の船」に参加した同じ仲間という固い絆で結ばれている実感を確認することができた。

お世話になるホストファミリーとの緊張の対面も終わり、市内から車で30分程のTUTONG郡で、



文化交流会が催された。当初、私たちは、BERSATUのメンバーとホストファミリーを交えた程の交流会が、ホテルの一室かどこかで行われるものと想像していた。しかし、実際には屋外の会場に200名以上のゲストが招待されており、その中には郡知事をはじめ、日本大使館の方やマスメディア関係者などが含まれていたのだ。予想をはるかに超える雰囲気、自分たちの出し物の成功を祈らずにはいられなかった。幸いにも、私たちの班のゼスチャーゲームは大盛況で、事前にいろいろと準備していった甲斐があったとほっとした瞬間でもあった。

2日間のホームステイを無事終えて、ホテルに戻ってきた参加者の表情を見ただけで、いかに充

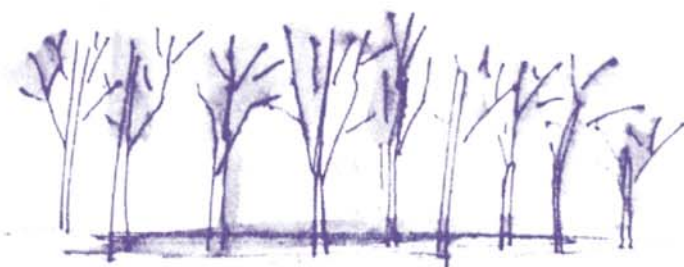
実した体験をしてきたかが、伝わってきた。

BERSATUのメンバーによると、来年にも滋賀を訪問するという計画が、すでに本格化しているようで、今回の参加者たちが、今度は自分たちが得た以上の感動を彼らに味わってもらえるように、来年の受入れをはじめ、様々な活動に取り組んでくれることを期待している。

最後に、ブルネイ滞在中を通じて、私たちの通訳としてお世話頂いた、三菱商事(株)ブルネイ駐在事務所の岩本修氏(第16回「東南アジア青年の船」参加)に、この場をお借りしてお礼申し上げたい。



ブルネイ国営放送  
スタジオにて ▶



## ブルネイでの出会い

静岡県青年国際交流機構

村田由紀子（第6回世界青年の船）

1996年11月「東南アジア青年の船」の二人の女性をホストファミリーとして迎えた。

それがきっかけで、手紙や電話で連絡をとるようになり、場所も知らなかったブルネイが近くに思えてきた。

ある日の電話で、その一人のブルネイ人から「ブルネイからマレーシアに達 ex-PY と遊びに行くツアーを組んだけど一緒に行かないか」と誘われた。ちょうど、休みも合うので早速に航空券を手に入れた。7月に入ってから連絡が入り、事情が出来ツアーには行けなくなったが、良かったらブルネイに来ないか、と言われた。

チケットはマレーシアのミリ行き。隣の国まで迎えに来てもらうことになった。

23時ぐらいの便でミリに到着、遅い時間でもあるし、迎えに来てくれているかが不安だったが、そこには約束していたマリアナ（マナ）だけでなく、私も初対面の「東南アジア青年の船」のメンバー達が他にも3人来てくれていた。車で2時間かけて…という話に申し訳なく感じた。その日はミリのホテルに宿泊。

翌日、ミリで買い物を楽しんだ。フルーツがたくさんある市場ではドリアンをはじめとした沢山のフルーツが、またマレーシアの物価は極めて低く、本や衣類もとても安く手に入った。

車でブルネイ入国。入国審査なども車内で済み、



▲ マナと“マナのお姉さん”の家族と一緒に

あまりにも簡単で拍子抜けした。走って行くと、シェルの看板、工場が目立ち、公園まである。この国では国がシェルの半分近くを所有しているらしい。それもあって、国王は世界一お金持ちとされているのだろう。公園で休憩をし散歩をしたが、海沿いにあり記念碑も建っていて、ひとつのデートスポットのように若者達が多く来ていた。周りには「ドンキー」と言われる石油を押し出すクレーンのようなものが点々とし、なんとも言えない光景だった。

滞在中はマナのお姉さんの家でホームステイをさせてもらえることになった。

ホテルはいいホテルがいくつかあるが、観光よりビジネス用で宿泊代がとても高いということだっ

た。お姉さんと言っても年齢がとても離れていた  
ので、私としては若いおかあさんといった感じで、  
かえて二人の娘たちが同世代といった家族だっ  
た。

良かったのは、別にお客さま扱いをするのでは  
なく、自然に接してもらえたこと。

二人の娘たちとも友達のようにいろいろな話が  
出来た。二人とも、私とマナがいる部屋に来て夜  
遅くまでしゃべっていたりしていた。妹は垢抜  
けた格好をしているなぁ、と思ったら、イギリス  
に留学中で夏休みなので帰国したと言っていた。

彼女がおもしろかったのは、日本人のボーイフ  
レンドと日本語で話したいから、と一生懸命マス  
ターしようとノートにぎっしりと日本語を書いて  
いた。驚いたのは、この国では親戚や友人がとて  
も頻繁にお互いの家に入出入りしていた。ある日は  
いとこ、ある日はおじさん、おばさんなど、よく  
泊まって行く人もいた。みんなが家族のようにい  
つの間にか居たりする。覚え切れないくらい多く  
の人と出会った。

家といえばこの国は家を持ちたい人は政府が建  
ててくれたものに対し、月々100US\$くらいから、  
支払いを15年から20年くらいかけて支払うシス  
テムがあるという。日本では考えられないくらい  
の格安な金額でマイホームが手に入る訳だ。そし  
て、税金も道路税以外はない。学費もかからない。  
アジア1の規模を持つ遊園地の入園料、アトラク  
ション代もかからない。

滞在中出かけたところは…いろいろな家にも行っ  
たが、ある日は、ex-PYたちとナショナルチーム  
のサッカー観戦をしたりした。10人以上の ex-PY  
たちと、ひまわりの種をかじりながら一緒になっ

て騒いだ。またユースセンターにも行った。ここ  
では、今年度「東南アジア青年の船」に参加する  
青年達が、去年行ったメンバーたちからダンスを  
習っていた。中には唄を作っている人もいた。毎  
日20時くらいから夜遅くまで練習をしていると  
のことだった。

ブルネイは人口も40万くらい、国の規模も小  
さいので、毎日でもほとんどのメンバーと会える  
のだという。

また、マナのお姉さんの中の一人が学校の先生  
をしていたので、授業の様子を見学させてもらい  
職員室で先生たちと話をさせてもらった。ここで  
は、小学校高学年にもなると授業は英語教育とな  
る。テキストも英語だったのには驚いた。

最終日、以前に我が家に来たナビルと彼女の弟、  
マナと一緒にミリの空港にに向かった。家族や友  
達のあたたかさを感じたい旅だった。



## スポーツを通しての平和貢献を願って

私のシリアにおける青年海外協力隊員としての活動も、今度の12月で早いもので2年の月日が過ぎようとしています。基本任期は2年なのですが、配属先からの要望もあり1年の任期延長が決定し、更に1年間、こちらで頑張ることになりました。

自分の活動の合間をぬって、第4次中東戦争の際にイスラエルに接収され、現在、領土問題となっているゴラン高原の視察をしたり、このゴラン高原からシリアに勉強をしに来ている学生が、ダマスカス大学で開催するゴラン高原展を通して、中東和平問題について学生と歓談するなど、自分の活動だけではなく、違った角度から大きな観点でこのシリアという国をとらえられるよう心掛けています。

今年の7月には、隣国レバノンで行われたアラブ大会に、シリアテニスチームのナショナルコーチとして選手を引率し、レバノンを訪れる機会がありました。レバノンは、アラブ世界を映す鏡として、宗教問題、民族問題を抱え、パレスチナ問題と中東紛争の複雑なかかわり合いを映し出していると言われています。そのレバノンにおいて、スポーツの祭典であるアラブ大会が行われることは、スポーツ振興交流活動を推進する自分にとってとても関心の高いものでした。

「世界共通の窓」であるスポーツが、アラブ諸

在シリア青年海外協力隊員  
篠崎 浩信（第21回東南アジア青年の船）



▲ レバノンで開催されたアラブ大会にて（対レバノン戦）

国の平和、しいては中東和平にむけて一歩でも役立つことを願わずにはいられませんでした。

なかでも、深く印象に残ったのは、パレスチナ自治政府からの参加でした。「パレスチナ国家」1988年にパレスチナ民族評議会（PNC）がパレスチナを領土とし、エレサレムを首都とする独立宣言を発表した国ですが、領土なき国とも呼ばれ、アラブの人々が、イスラエルを呼ぶ時に使われていることからわかるように、アラブ諸国の間でしかその独立を承認されていない国でした。

しかし最近、イスラエルとの和平交渉により、パレスチナ自治政府が発足し、アラファト自治政府議長のもと、パレスチナ人による自治が始まり、「パレスチナ国家」建設に向けて、新たな段階に



進んでいるところです。そんなパレスチナ自治政府からの選手参加はとても意味深く、アラブ大会らしいものでした。

またレバノンも、1975年から'76年にかけての内戦、その後イスラエル、シリアの内戦介入に及んで1989年国民和解憲章が採択され

るまでの15年間、内戦状態にあり、その間、中東のパリ、中東のスイスと呼ばれたベイルートは瓦礫の町と化しました。

そのレバノンも現在では復興が進み、銃弾や砲撃の跡が生々しかった建物も次第に姿を消し、町も平和を取り戻しました。この大会はレバノンの復興をアピールする上でも大きな意味をもつ祭典だったと身をもって感じることができました。

レバノンの子供たちに日本のことを聞くと、「レッドアーミー」という言葉がかえってきました。最初は何のことかわからなかったのですが、「日本赤軍」のことを言っていることがわかり、



▲ シリアのテニス教室の教え子たちと

思わず苦笑いをしてしまいました。中東戦争の激戦地として有名であり、シリアとレバノンの国境にひろがるベッカー高原では、大根が売っているのですが、赤軍のメンバーが初めて栽培をはじめたという話もあり、こちらの日本人の間では、冗談で赤軍ダイコンと呼んだりしています。

初めは、シリアという国をロクに知らないまま、こちらに赴任した自分ですが、今はすっかりシリアに落ちついてます。ヨーロッパやロシアに近く、ヨーロッパとアジアの文化がぶつかり合うこの国での生活は、いろいろと面白く、楽しい一言です。

来年は、活動も充実し、忙しい日々になりそうですが、活動とともに自分の見聞もさらに深めたいと考えています。



◀ バルミラの遺跡

## 旅のうまうま～インド編～

岡谷 和志

インドと言えば、やはり「カレーはなんで辛いんだあ」などという、人間にとってより根本的で本質的、哲学的でキカガク的な命題を、誰もが唇の端や眉間に人間の存在的苦悩をにじませながらそれでいて生き続けてゆく限り考えずにはられません。(なんだそりゃ)

とにかく(?)なぜインドでは、みんな毎日カレーを食べ続けているのか?昔ならともかく、これだけ国際的交流のできる今日、他文化の食生活を安易に導入せず、「カレー」にあくまで固執してしまうのは、つまり「インド人はカレーで動くようにできている」のではないか、などと考えてしまいますね。(それはオレだけなのだろうなあ)しかしやはりさすがに(?)インド人、だてに人口だって多いわけじゃない。

「カレーはカレー」なんて一口に言ってはいけません。名称として「カレー」というのはそんなに使われてない様です。「ダール」とか、「マサラ」とか、インドにはたくさんの、いわゆるカレーがあるんですね。豊かなインド人宅におじゃましたという人は、その高価で質のよい香辛料をふんだんに使ったカレーが、ちっとも辛くなく、マイルドで深い味わいだったと話してくれました。

しかし、貧しい家の人々はもうめったやたらと辛いカレーをつくり、大家族がそれでたくさんのご飯やナン(インド風パン)を食べ、おなかを満たさねばならないそうです。うう、悲しい話です

ね。ハンカチを用意しましょう。

さて、僕がバナラシで通っていたカレー屋さんには南インド、ケララ州のカレーをバナナの葉っぱにのせて食べさせてくれるという、なかなかおしゃれな(?)店でした。このカレーはベジタブルのみの、確かにめっちゃめっちゃ辛くはあるが決してそれだけではなく、深い味わいのあるもので、ご飯やおかずがなくなると、待ってました!!とつき足して、それが延々と続く、もううまさにそれは「わんこそば」状態。それでもおっさんがニコニコ「食べる!」ってのは、気持ちいいものでした。ごちそうさま!

### 著者略歴

本名：岡谷和志 昭和45年生まれ、現在26歳。

中央大学文学部文学科で英米文学を学ぶ。

卒業後1年間アルバイトをして旅行資金を貯め、平成7年6月渡米。以後、平成8年8月までおよそ14か月間、北半球25か国、約80都市をあてもなく、自由に旅行する。現在、山口県の山間部の小さな町で母と子猫と暮らしている。

平成9年1月から山口市の地域情報公告紙「サンデー山口」において、14か月にわたる旅行を順に追う手描きスタイルの連載「まるお同本舗・日本への道」(全24回)をスタートさせる。

## 第16回青少年国際理解セミナー

## 「国際青年育成交流」「日中、日韓青年親善交流」帰国報告会

平成9年度の航空機による派遣事業の参加青年による帰国報告会が下記の日程で行われます。

総務庁青少年対策本部が行う青少年国際交流事業についての全体的説明コーナーもありますので、他の事業に興味のある方にも声をかけてあげてください。

**日 時**：1998年1月25日（日）12:30～16:30

**会 場**：国立オリンピック記念青少年総合センター 国際会議室

**参加費**：無 料

**主な内容**：中国、韓国、ブラジル、カナダ、ドミニカ共和国、ドイツ、インドネシア、ジョルダン、ネパール、ジンバウエをそれぞれ訪問した団員が持ち帰った品々の展示、写真展示、ビデオ上映、事業体験談発表、グループ別懇談等のプログラムに各国のお茶やお菓子を楽しまながら参加していただきます。

## 第17回青少年国際理解セミナー

## 第24回「東南アジア青年の船」帰国報告会

平成9年度の第24回「東南アジア青年の船」参加青年による帰国報告会が下記の日程で行われます。

平成10年度の総務庁青少年対策本部青少年国際交流事業の募集説明も行われますので、総務庁青少年国際交流事業について知りたいと思っている友人知人の方々に、ぜひ知らせてあげてください。

**日 時**：1998年3月15日（日）12:30～16:30

**会 場**：国立オリンピック記念青少年総合センター 国際会議室

**参加費**：無 料

**主な内容**：船内及びアセアン各国寄港地（ブルネイ、インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ、ヴィエトナム）での活動を撮影した写真や団員が持ち帰った品々の展示ビデオ上映、事業体験談発表、グループ別懇談等のプログラムに、各国のお茶やお菓子を楽しまながら参加していただきます。

**申込み先**：財青少年国際交流推進センターの「セミナー係」までFAX又は葉書にてお申込み下さい。

〒103 東京都中央区日本橋人形町2-35-14 東京海苔会館6F

財青少年国際交流推進センター セミナー係

電話 03-3249-0767 FAX 03-3639-2436

## 「世界青年の船」リユニオン ～新春船上パーティー～のご案内

主催：日本青年国際交流機構

日時：平成10年1月18日（日）16時30分～

会場：東京港晴海L岸壁 「にっぽん丸」船上

会費：7,000円（ティーサービス、パーティー含）

参加申込：参加希望者は、「氏名、派遣事業名、住所、電話番号」及びリユニオン  
参加希望と明記の上FAX又は郵送でお申込み下さい。

日程：受付 16時30分～

懇談会 17時～18時20分（ティーサービス）

パーティー 18時30分～20時30分

### 編集後記

交流の秋、無事終了！ 残すは、「世界青年の船」の受入れですね。茨城県、兵庫県、香川県、佐賀県、長崎県、広島市の皆さん、よろしくお願

いします。福島での全国大会は、多くの参加者を得て実施することができました。実行委員の皆さんありがとうございました。

\*本誌の年間講読をご希望の方は、(財)青少年国際交流推進センターまで葉書又はFAXにてお申込み下さい。年間講読料は1,500円です。

MACROCOSM（マクロコズム） 1月号 Vol.20 1998年1月1日発行（隔月発行）

編集：マクロコズム編集委員会

発行：財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103 東京都中央区日本橋人形町2-35-14

TEL 03-3249-0767

FAX 03-3639-2436

e-mail LDP04056@niftyserve.or.jp

編集協力：総務庁青少年対策本部

日本青年国際交流機構

定価：198円（本体189円）

印刷所：株式会社 絢文社

TEL 03-3959-3960

## ～ 世界の子供たち ～

中国と韓国の子供たちの様子も含めて、世界の子供たちの表情を取り上げてみました。



### インドネシア

◀ ジョグジャカルタ近郊ムエナ村  
インドネシアの小学校は子供の数が多いため  
に2部制を取っており、この生徒は午前7時  
から12時まで学校に行き、昼からこうして  
遊んでいる



▲ ムボロ病院の知的障害棟の待合室にて

### ジンバブエ

### ドイツ

▼ ギムナジウムの子供たち



### 「国際青年育成交流」事業（青年海外派遣）

皇太子同妃両殿下の御成婚を記念して平成6年度より始められた「国際青年育成交流」事業は、日本青年を世界各国に派遣する「青年海外派遣」と諸外国の青年を日本に招へいする「外国青年招へい」の二つの事業より構成されており、ともに現地の人々との共同体験交流活動を基本に置いています。

平成9年度は、ブラジル、カナダ、ドミニカ共和国、ドイツ、インドネシア、ジョルダン、ネパール、ジンバブエの8か国への青年海外派遣が、9月2日から25日の期間で行われました。

## 国際青年育成交流

娘たちを見守る母のあたたかい眼差し ▶

ドミニカ



ネパール

▼ ドンバス村にて折り紙を教える



韓国

▼ 漢江を下る遊覧船にて家族連れと交流



中国

北京第二実験小学校にて ▶

ジョルダン

▼ マダラサット・アサシーエにて

